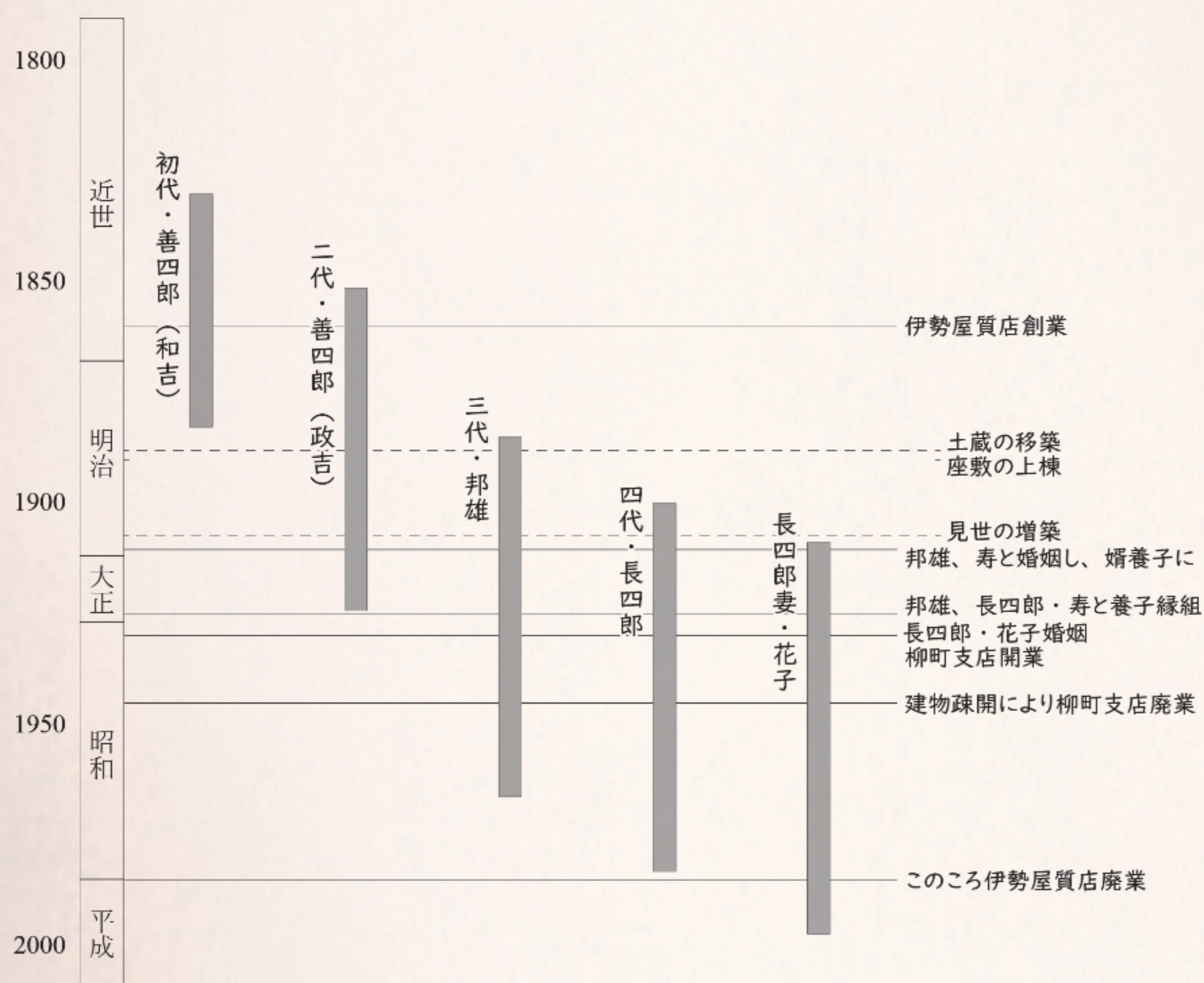


# 伊勢屋質店の歴史と人物



文京区ふるさと歴史館【2000】、文京区教育委員会【2018】、および聞き取り調査をもとに筆者作成

伊勢屋質店は、万延元（1860）年の創業と伝えられています。それから四代にわたって営業した、歴史ある質店です。旧東京市内の質店は、関東大震災により甚大な被害を受けました。震災を乗り越えた499店のうち、明治以前の創業はわずかに31店であったといいます[東京市社会局 1926]。この調査は震災の混乱のなかで行なわれた調査であるため、不正確な部分もあります。けれども、伊勢屋質店が、江戸期に創業され、震災や戦災を切り抜けながら、近年まで営業を続けた数少ない質店であることは確かです。

創業者は永瀬善四郎[1824?-1882]で、以後、永瀬家が伊勢屋質店の暖簾を守ってきました。初代善四郎の父善右衛門は、相模国鎌倉本郷中之村（現・神奈川県横浜市栄区）の住人でした。初代・善四郎は、相模国から江戸へ出て、小石川大塚の伊勢屋・島田藤右衛門方へ奉公したそうです。その後、万延元（1860）年に菊坂町の家を購入し、伊勢屋質店を創業、独立しました。

二代目・善四郎[1851-1924]は、初代・善四郎の甥と伝わる人物で、伊勢屋質店の基礎を築きました。政吉という名でしたが、伊勢屋質店を継ぐと善四郎を名乗りました。土蔵の移築、見世の増改築、座敷棟の新設など、現在みられるような旧伊勢屋質店の店構えが形成されていきました。樋口一葉が伊勢屋質店に通ったのも、二代目・善四郎の時代でした。

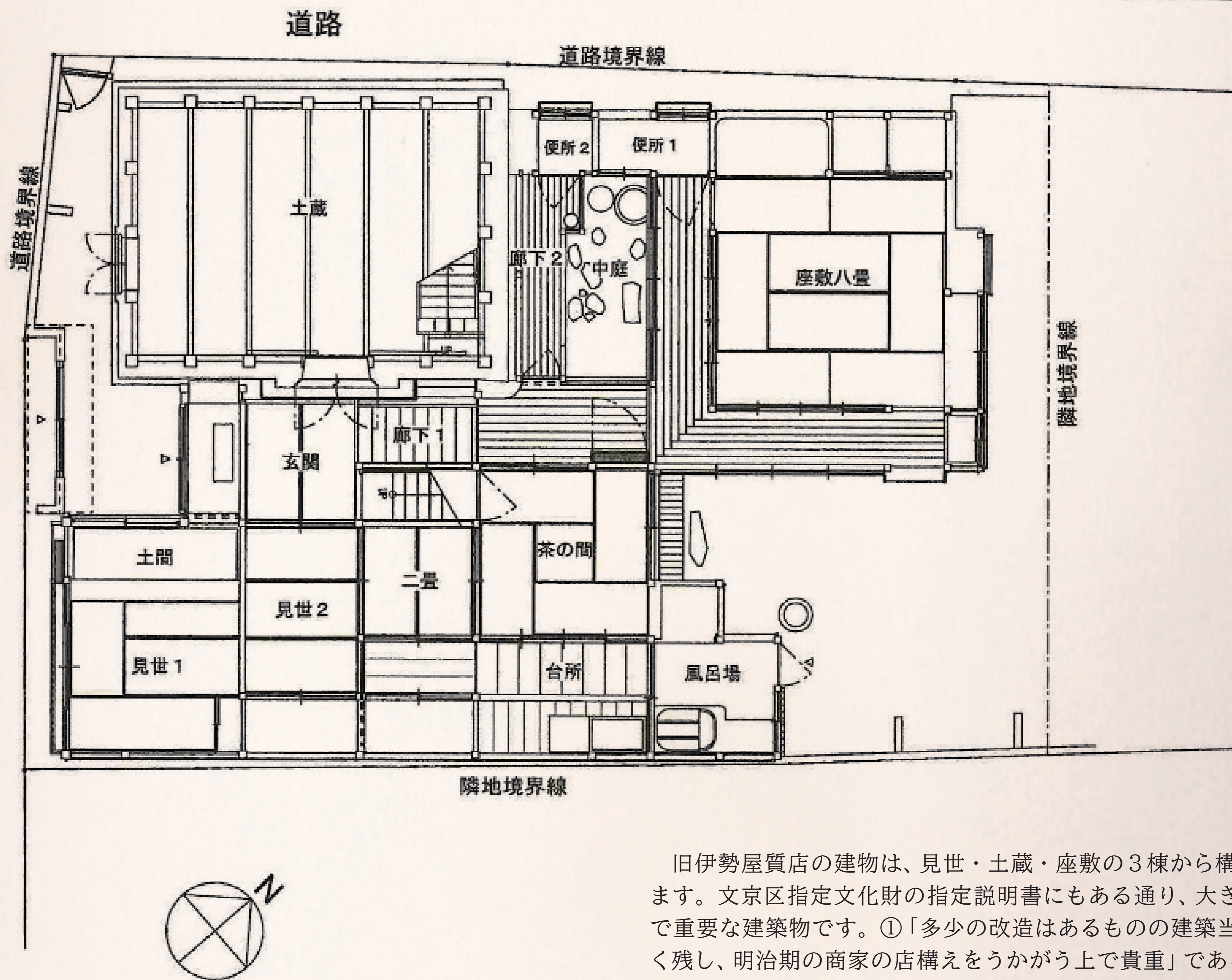
三代目の邦雄[1885-1966]は、もと伊勢屋質店の番頭であったといいます。二代目・善四郎の三女・寿と結婚し、のちに婿養子となって、あとを継ぎました。昭和7（1932）年には、柳町に支店を開業しました。

この支店の運営を任されたのが、のちに四代目となる、長四郎[1900-1984]でした。長四郎は二代目・善四郎の四男です。柳町支店は、戦時体制の影響を受けました。空襲被害を軽減するための建築物の除去する施策、建物疎開が行なわれ、その対象となりました。柳町支店は昭和20（1945）年3月9日に廃業し、長四郎一家は、神奈川県二宮町に疎開しました。

戦後、戦災を逃れた伊勢屋質店には、三代目の邦雄一家と四代目の長四郎一家が、同居することとなりました。やがて伊勢屋質店の経営は四代目長四郎が行なうようになり、邦雄は菊坂町会の役員を歴任しました。その後、長きにわたり、長四郎が店を守ってきました。長四郎が病に倒れ、昭和59（1984）年に亡くなると、妻・花子が暖簾を守ろうと努力しました。時代は昭和から平成に変わる時期に、創業から130年あまりつづいてきた伊勢屋質店は、その歴史に幕を閉じたのでした。

金子祥之、2020、「伊勢屋質店の生活史—暮らしから建物の保存まで」『ゆかり跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書』(1) 伝統技法研究会編、2000、『旧伊勢屋質店調査報告書』文京区教育委員会・文京ふるさと歴史館  
東京市社会局社会部、1926、『東京市内及郡部に於ける質屋に関する調査』  
町田聡、2018、「旧伊勢屋質店の歴史」文京区教育委員会編『旧伊勢屋質店調査報告書』文京区

# 伊勢屋質店の建造物



旧伊勢屋質店の建物は、見世・土蔵・座敷の3棟から構成されています。文京区指定文化財の指定説明書にもある通り、大きく3つの点で重要な建築物です。①「多少の改造はあるものの建築当時の姿をよく残し、明治期の商家の店構えをうかがう上で貴重」である点、②「出格子、出桁造り、土蔵造りの袖蔵などに江戸時代からの町家の作りが継承されている」点、③「各棟の建築および移築の年代や大工等が判明」する点です。すなわち、「数少なくなった明治期の東京の町家建築の指標となる貴重な遺構」と言えます。

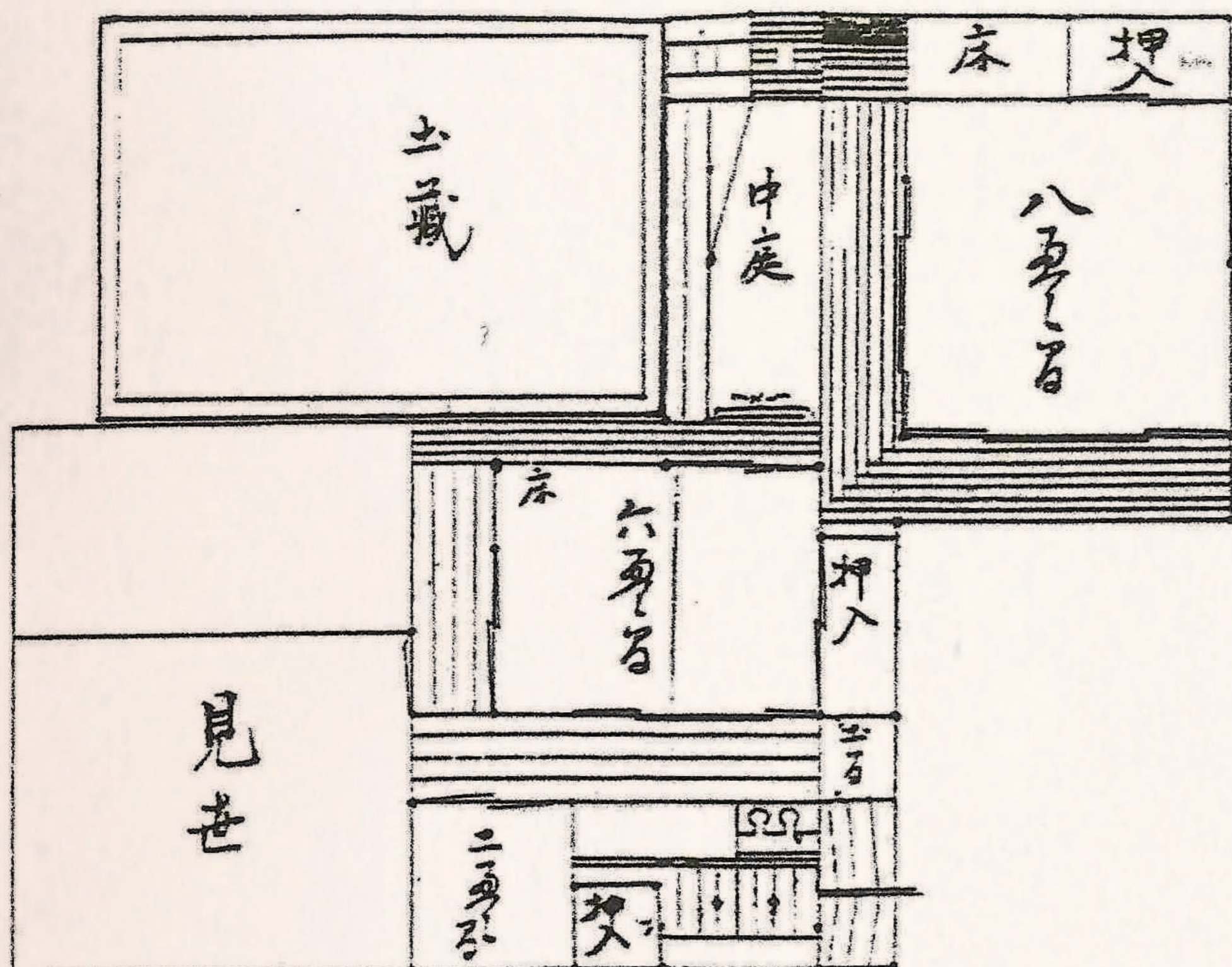
## 建築の変遷

間取り図1は、明治23(1890)年に座敷増築時に作成されたと推定される図面です。この増築によって、見世・土蔵・座敷棟の3棟から構成される、伊勢屋質店の建物が揃うこととなりました。座敷は主に接客用に用いられました。

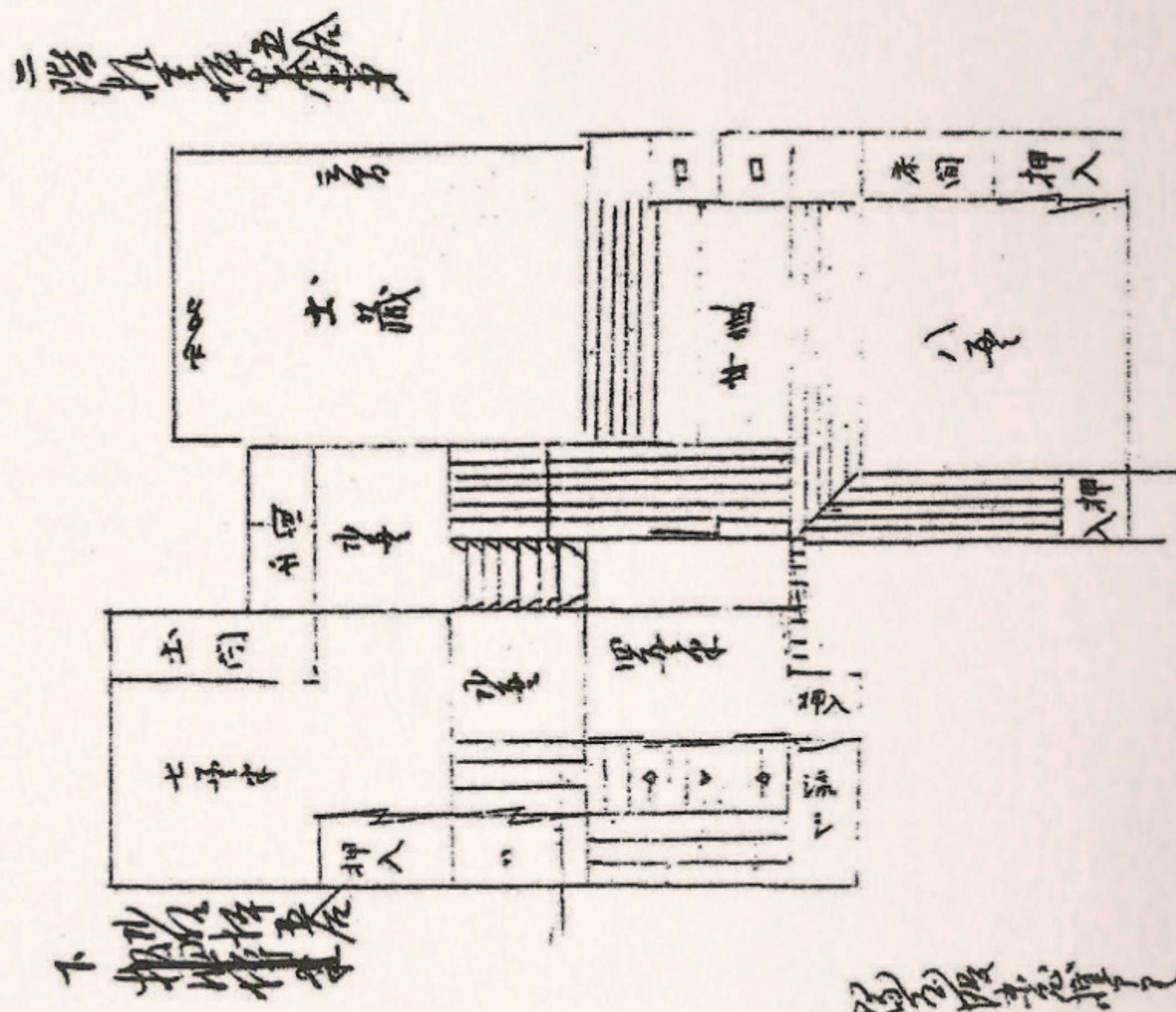
間取り図2は、明治40(1907)年に作成されたと推定される図面です。2つの図を比較すると、見世が増築されたこと、玄関が設けられたこと、2階へ上がるための階段が取り付けられたこと、などが確認できます。このような変化は、明治期の住宅の特徴である、床の間や玄関が庶民住宅にも取り入れられていく過程を示しています。

伊郷吉信、2018、「旧伊勢屋質店の建物の沿革と特徴」『旧伊勢屋質店調査報告書』文京区教育委員会をもとに作成

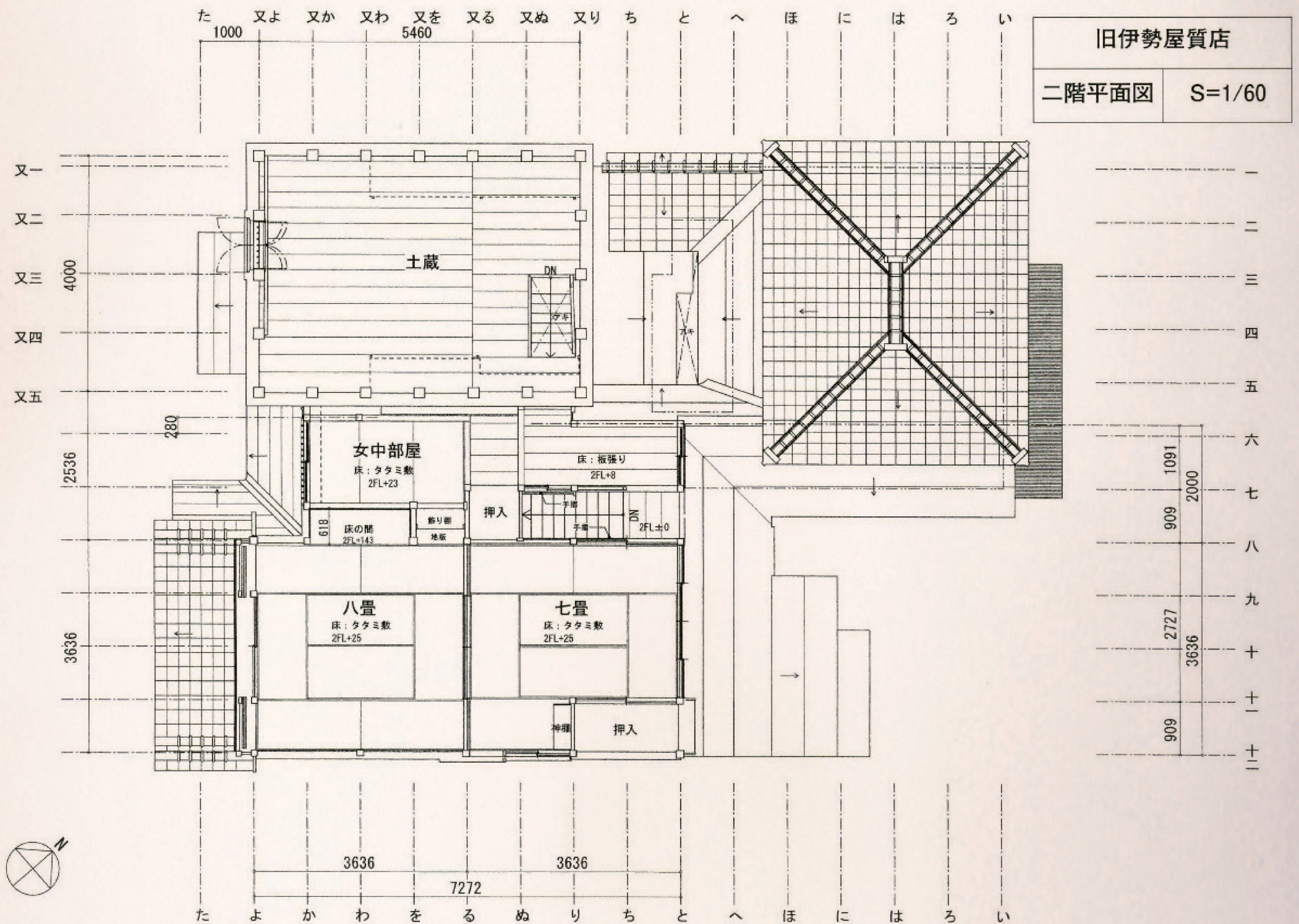
間取り図1(明治23年座敷増築時に作成されたと推定)



間取り図2(明治40年見世増築時に作成されたと推定)



## 二階のつくり



二階には、3つの部屋があります。見世の上部に和室が2部屋、玄関・廊下の上部に1部屋が設けられています。和室2部屋は家族住室や座敷として、小さな1部屋は奉公人の住室として使われてきました。

道に面した八畳間には、床の間と脇床が設けてあります。七畳間には押入れが設けられ、東側の隣家に面して窓が造られています。2部屋は襖で仕切られ、その上部には板欄間がはめ込んであります。二階は続きの座敷としても活用され、人寄せや寄り合いに使用されることも多かったそうです。普段は、家族の住室となっていました。戦後、三代目の邦雄氏一家と四代目の長四郎氏一家が、同居することになってからは、おもに邦雄氏一家が生活していました。

見世と土蔵をつないでいる、玄関・廊下の上部にあたる小さな空間は、戦前は女中部屋として使われていました。またその時代には、奉公人は、見世でも寝起きしていたといいます。女中部屋は、往時の奉公人の姿が浮かび上がってくるような空間になっています。

なお、二階部分は非公開となっております。ご了承ください。

2階 座敷



2階 女中部屋

